慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	再論『現代大都市論』
Sub Title	The author of "metropolitan community, to-day" reflects upon recent urban studies in Japan
Author	奥井, 復太郎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1963
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.56, No.10 (1963. 10) ,p.885(1)- 901(17)
JaLC DOI	10.14991/001.19631001-0001
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19631001-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

再論『現代大都市論』

奥井復太郎

はしがき

憶えば一九二〇年の頃であった、当時のわが理財科の主任（学部長）であった堀江帰一博士から専攻として都市経済の研究を命ぜられたのは。今日こそ都市経済という言葉も不思議とは思われない、既に地域経済という言葉すら出来上っている現在である。当時としては漠然と都市研究、それも経済学部の科目としてという程度の理解であったろう。都市研究のうち、その頃既に一般化されていたものは地方自治制を対象としての市政論があった。同時に一九二〇年代には都市の経営論と云う可き新しい傾向が起りつつあった。地方自治体の仕事は、その性格上ビジネスの原理に基く可きであるという考え方にその傾向は示されていたが、米国市政学者のチャールズ・ビアード博士はこの頃来日して、時の東京市長後藤新平の顧問として我国の市政研究に新風を吹き込んだ。

しかし都市行政問題をビジネスの角度から見ることは、諸事万端ビジネス本位に考えがちな米国独自の傾向とのみは見られない。英国には地方行政論に於てシドニー・ウエッブがいた。しかもウエッブの考え方はその属するフェビアン協会の精神と理論に基いて社会改革の重心を地方自治体に求めて所謂浸透政策を強力に展開していた。都市行政の多くの部門は、可否有無の政治的決定に関するものでなく、その実施は如何に行わる可きかという、今日の言葉で云えば経営管理に関するものである、というのがウェッブが浸透政策を

新刊紹介

山中篤太郎著『イギリス労働運動小史
——労働運動の理解のために——』…飯田　鼎 112
岡　稔著『計画経済論序説
——価値論と計画化——』……加藤　寛 113
川田　侃著『世界経済入門』……矢内原勝 113
A. ウィリアムズ著『財政と予算政策』……古田精司 114
S. モルニエ他著 栗田功，浜田泰三訳『コンミューンの炬火
——ブランキとプルードン——』…野地洋行 115
C. P. キンドルバーガー著『外国貿易と国民経済』……深海博明 116

展開した時の所念であった。都市交通・住宅・衛生・上下水道・教育等々いずれもそうした性格の問題であり事業である。フェビアニズムの持つこの実際的改革の意図と政策とは、為めに「ガスと水道の社会主義」という貶称を蒙ったが、ここに都市社会を処点にして庶民の生活の裡にコレクティビズムの根を深く掘り下げて、社会主義への前進を確立しようとした彼等の志向はまことに立派だったと云える。アドミニストレーションとしての都市経営主義は既にあったわけである。

当時（大正中期）新しい変革を迎えようとしていた時期に堀江学部長がその革新性の故にこうした新しい分野をわが経済学部の研究及び教育面に導入した事は誠に驚く可き慧眼であった。爾来この課題は私の専攻になって数十年に及んでいる。この度、これも私にとって最も思い出の深い本誌に寄稿を求められたが、それがはしなくも自分の研究歴を顧みる機縁になった。昭和二年に開設された「都市経済論」という科目は、その名称のまましばらく続いたが、後年になって「都市問題」とより一般的な名称に変えられ、更に一転して私自身の系統に即して「都市社会学」と改称されて今日に到った。この名称の変化もその責任は私にあった。つまり当初「経済論」として指定された事は都市の経済学的分析又は経営論的研究として指定された筈であったが、私自身の偏向から、その研究が内容的にも方法的にも全く異なった社会学系統に移ってしまったからである。この点今日なお、こうした放縦を黙って見逃してくれただけでなく、逆にこの新しい分野への発足を陰に陽に助けて下さった先輩同僚諸氏とその学園に限りない感謝を懐く所以である。

昭和十六年そうした諸氏の激励の下に公にされたのが「現代大都市論」であった。その後二十年を経過している。しかしこの二十年に就いてみると都市研究の著しく熾んになった今日頗る感慨無量であって、その意味でも慶応義塾が早く新分野を拓いた事を誇りと思うと同時に、当時の理財科の諸先輩の卓抜した識見に改めて敬服せざるを得ない。「再論　現代大都市論」はこうした境地で執筆された事を、私事をまじえて恐縮千万であるが一応おことわりいたしたい。

（一）

都市論及び都市研究に従来幾多の迷蒙があるという見地から、いかなる時代の都市現象もそれを生起させた時代の約束と

運命、並びにその時代が果し、且つ果さんとした使命とによって、観察されなければならぬ制約を持つ、という説は今日にいたるまで筆者の所懐するところである。構造論的には、それぞれの時代が如何ようにあっても広義の社会結合のうちにあって中枢的機能を果たす中心としての、且つその空間的表現としての都市現象を認めるに吝かでないが、社会結合の時代的変化は当然、機能中心の現象たる都市の在り方にも現実に幾多の変化を及ぼさずにはいない。徳川幕府は、実質上日本の首都であったが、ただそれだけの点に於て往時の江戸と今日の東京とを同列に論ずる事が出来るであろうか、否同列に論ずることが許されるであろうか。人間が経済の生産組織のうちに労働力としてはいり込むという関係だけを以て奴隷や農奴と今日の勤労者とを一緒に取扱って差支えないものであろうか。現に空間的拡がりとして考えただけで世界経済の現代に於ける都市現象が、極めて狭小な地域にその経済・社会生活が局限されていた時代の都市現象と体様的に異ならぬとはどうして主張することが出来るか。今日、大都市の経済・産業的特徴の一つとして、如何に対外的外延的活動がその都市構成の主要な要因となっているかという事実が強調されている。これら活動の対象を市場とするならば、今日都市の持つ市場は、勿論豊富な購買力を持つ巨大人口集団それ自体にも求められるが、それにも増して、対外的非地元的な市場をかかえている全国的乃至は世界的市場が幾多の活動の対象となっている。そうしたより広大な社会結合に於てその中枢機能を蔵して成立している大都市は、狭小な空間に於て成立している都市現象と全く体様を異にするのは当然である。

それにも拘らず、都市研究者はかつて、時の古今を問わず同列に都市を論じた。成立の空間的約束の異なる都市を十分に識別しなかった。百万人大都市の存在が注目された事は既に相当早い頃であったが、百万人大都市を成立せしめる機縁の何んたるかをわきまえる事は無かった。それ故に徒らな論議が繰り返され、無駄な方策が反復されていた。拙著「現代大都市論」はこの意味でいくつかの珍奇な説を披瀝したといえる。

例えば現代大都市と名づけられるものは人口数で少くとも百万を単位とするとか、都市とは社会組織体の組織機能のうち

中枢的働きを蔵する空間的存在であるとかいう主張がそれであった。即ち百万人の人口はその集団が存在している事に本来的の意味があるのでなく、百万人をしかく集合せしめている社会力の存在並びに作用に意味があるので、何がこれを成立せしめたかという点が問題なのである。百万人の都市社会は、人口が多いという事だけで十万、二十万の都市とは多方面について異なるという事も云えるが、仮りに徳川時代の江戸に百万の人口があったとして、それは今日の百万人級の大都市と同じ様相を示してはいなかったであろう。今日 Pre-industrial Town の研究が一部に盛んになっている様に見受けられる。この事は一体何を意味するであろうか。或る論者は、都市（シティー）は数千年の歴史を持つがメトロポリス（Metropolitan Community）は僅か百年程のものであると指摘する。数千年以前の集落を、如何様に人口が密集しており市街建築的景観を呈していたにせよ、それを都市と名付け得るとすれば、どのような標識に基いたものであろうか。農産食料品を自己の地区内に生産しないで他地の供給に仰ぐという標識は確かにこの場合通用し得たかも知れぬ。しかし全体的に農業経済的であった時代に果してこの標識で十分満足出来るだろうか。ウイリアム・ペティーのロンドン将来人口局限の推計は、ロンドン市民を十分養い得るこの種生産物が、当時の運輸交通の手段からして、ロンドン市外あまり遠方ならざる地域の農業生産力によるものとして計算されたが、カナダ、ロシア、アメリカ、豪州等からの搬入が可能になる事によって推計人口の局限は簡単に破られた。そしてこの事実は、農産物がどの程度、何処から輸入されているかという事実関係よりも、それが全面的に可能になった事態、即ち Industrialization と呼ばれる事実とその社会的結合に大きな要因を見出すのではなかろうか。都市は商工並びに文化を集積していたではあろうが、インダストリアリズムと呼称される時代以前には、豊かなる農業地域と直接的に密接な関係を持っていた。近在物という言葉は当時では通例の事であって、今日ではむしろ非常に特殊化した表現であると共に大都市住民に容易に接するという意味では近在なる地点が非常に拡大して了っている。つまりこういう事態と関係とをつくり出している組織・結合そのものが重要なのであって、そうした組織・結合の裡にあっては、人間・制度・風俗等々に到るまで、その組織・結合の精神と原理によって規制されて来る。従って大都市社会の理解はその社会を包含している全社会組織及び構造の理を弁える事から可能になる。元来組織そのものは、現有素材に基礎を置くが故に、組織自体は一定の精神と原理とに基いて特有の統制を行う。組織自体には組織目的が存在するが、ために素材を如何に有効に活用するか、ここに組織の巧拙が生まれる。幼児を扱うのに一人前の成人に対する方策が妥当ならざる様に成年者を扱うに幼児視して対処する事の不都合なると同様である。民主主義とはその国民の教養如何に応ずるものであるとの説があるが、あらゆる組織並びに構造は、素材の関係について云えばまさに同断である。例を建築にとるならば、紐育、東京にみられる様な摩天楼群は鋼鉄とコンクリートを素材としてはじめて可能化されたもので、その建築的特色は如何に高層化されても、地面に最も近い部分の階層から既に十分な照明空間をそなえて有効利用面積になっているという点である。古代の石造建築にあっては高層になればなるほど下層は基礎構造の部分となって十分な照明空間が持てず、地上にあり乍ら地下室的な有効利用度しか持たなかった。即ち建築技術はスティール・コンクリートの利用に於てビジネス・センタアの都心的過密を可能にした。かくの如く素材は組織のあり方を規定する一つの要因である。（組織のダイナミックの点については茲では省略する。）

（二）

この様にして今日の大都市現象は今日の社会組織を決定している基本的な関係やその論理の裡に決定され、従ってその理解を先行せしむる事によって大都市社会の諸相をも有力に解明出来る。それ故に百万人級の大都市は現在の経済・政治・社会の規定として捉えるということが「現代都市論」の中心命題であった。例えば大都市現象の一つに所謂ラッシュ・アワーの現象がある。この現象を如何ように捉えるか、ただ単に交通施設のまかないきれない超多量の交通需要がある事態と解釈するのも一法であろう。しかし今日の社会が大都市の場合、その空間的拡大にも拘らず、狭窄の都心部にホワイト・カラー

の大群を通勤せしめるという事態に対応した現象なのである。即ち昔と違ってこの種の市民は（そして社長や重役たちも含めて）職場が完全に居住と分離しているという事。更に彼等の勤務は定時刻的にパンクチュアルに拘束されていること。即ち勝手づとめは許されない事。職場、即ち事業所は相互に同時同刻に事務を開始し且つ閉止しなければならぬ事。この場合休日も特定一定化している事等が重なりあっている。しかも所謂通勤階級と称するものはその経済・生活身分に基いて、文化性をそなえ乍ら居住費用の低廉なる事を生活の必須条件とするが故に、市街地地価の情況と相俟ってますます都市外方への移動を余儀なくされる。茲に通勤距離の延長と共に通勤費の問題が生じて来る。定期券交通の問題が登場する所以でもある。或いは公設公営の住宅団地などが途方もない遠隔地に建設されて入居者に多大の困惑を感ぜしめる等の事態を招来しているが、斯くの如き関係から発生して来るのが所謂ラッシュ・アワーの現象なのである。夏目漱石は早くもその作品のうちに「野々宮さんの様な大した学者が、本人が好きこのんでこんな偏僻なところに住み込んでいるならいざ知らず、大学の俸給が少ないのでこんな所にしか住めないというのならば、何んとも気の毒千万……」という意味の記述をしているが正にその通りである。都市中心部の地価昂騰は一般市民を駆って遠く遠く外方に逐いやる。しかも彼等の職場は依然として狭小なビジネス・センタアに置かれている。通勤現象は、この型に於ての大都市では日常的なものである。この間最も不思議に思うのは事業所の側が、かかる通勤疲労の労働力をあまり気にしていないという点である。通勤者が強靱であるか、執務状況がルーズで半疲労の状態を何等顧慮しないのか、いずれにもせよ、ビジネスが厳し過ぎる位きびしい世界としては不思議な現象である。

例は通勤地獄に止まらぬであろう。開放的であって流動的な現代大都市の生活は、完全に近隣集団の社会性を崩壊してしまった。自己居住の地元に頼る何等の必要性を見ない、流動極まりなく、且つ生活関心の細分化につれてその行動の多方面化した今日の生活では、緊密な古来の近隣関係は煩わしいだけの事である。地元的防犯活動の如きは江戸時代の世相をほうふつさせる戯画に過ぎないが、それすら必要止むを得ずとする所に、わが国の大都市のちぐはぐさを痛感させる。

（三）

こうした理由で、筆者は現代的問題性を持った大都市現象を現代的規定のうちに捉えてみた。この事は従来の都市研究がコムミュニティー（この原語も今日では地域社会という言葉で漸く定着したが）地域社会そのものを対象にしていたという点で対照的になったのである。勿論都市現象の一つの面は、地域的生活共同体という事実で、土地を同じくして多くの人々が集団的に生活する場合、そこに当然生活の共同化が成立する。同一の市場を利用し、同一の秩序に服し、同一の施設便益を享用する等、生活組織の共同化は当然である。しかしこれらの点は集落人口の大小多寡を問わない。或いは時代の新古も問題にはならぬ。勿論巨大集団には弱小集団に見られぬ共同化の進歩がある。交通に市街電車が必要か否か、市内ハイウェーの必要度如何は、人口集団の大小にも関係するところが多い。しかし方式の相違はあっても生活共同化という点では同一である。この故に「現代大都市論」ではこの面が意識的にはずされていた。それに対して広域に亘る組織の中枢的機能の所在という、都市機能に目を向けたという事は確かに別個の観点といえる。

しかし、この生活共同体という観点についても、比較的新しく都市化（Urbanization）という考え方が導入されて来た。国連並びにユネスコ等の学術文化活動の領域に前述の工業化と共に平行語として都市化という事象を特に前面に打ち出して来ている。この両者の関係については別に述べるとして、この都市化とは何を指したものであろうか。都市集中、乃至は大都市集中の事実を指すか、又はルイ・ワースがその名論文で指摘しているように、一つの生活方式（Urbanism as a Way of Life）を指摘しているのか。ここにも一つの課題が認められる。しかし Urban Frontier の著者が指摘した点は筆者にとって、たしかに一つの反省であった。既に述べた様に都市現象の時代的規定から、敢えて百万人級大都市を研究対象に限った筆者は、

その為めに、その研究領域では人口数万、数十万級の都市を局所的規定の現象として殊更に無視した。（誤解のない様に説明しておくが、他の条件を同じとするならば……実際にはそのような事態は皆無だと思うが……居住空間としては十万乃至二、三十万の人口の地が最も好ましい都市形態ではないかと思うし、又当面の巨大都市中心の情勢がそうした中小都市の衰勢を招致している事実に若干の興趣を持ち、更には昨今の地域経済開発方式に多大の関心を寄せている次第であるが）しかし「フロンティア都市」の著者は十八世紀初頭の米大陸の所謂辺疆集団がその生活の体様に於て如何に都市的であったかをまざまざと示してくれた。この著書は、前段にも述べたように、現代大都市研究に対する一つの歴史的反省を意味する部類に属する研究であろうが、その頃アパラシヤ山脈を越えたところのピッツバーク、レキシントン等の諸都市が如何に都市施設の整備に努力し、又それらの市民もその生活方式について市民的誇りを持っていたかを記述している。この年代と当時それらの都市の人口が如何に多く計算しても三万人内外、五万とは達しない程度の辺疆地帯に地下下水道を考え、街灯は勿論、道路舗装を計画し、更に、西のハーバアドと称せられる程度の大学大学院を持ち、病院、美術館、劇場等の公共施設について市民並びに市当局が苦心し乍らその完成を目ざしていたかという紹介に接しては、Urbanization の見地からひたすら敬服せざるにはおられなかった。エンゲルス描くところの産業革命期の英国都市ではアイルランド移民が豚と同居して市街の汚穢化の源となったとあるが、（それに似た記述はこの書物のうちにも見受けられ、豚が愛玩動物の様に放し飼いになっていて、匆々市の規則で取締られたとある。）これら辺疆市民が高い水準の生活を要望し且つその達成につとめる所に人間尊貴に伴う生活尊重の風を痛感される。それ故に都市化とは数の問題ではなく生活様式、如何に人間性が尊重せられているかの問題として理解される。この故に筆者はさる委員会に於て意見を述べるに当って、都市生活の環境は、人間活動を最も機能・合理的に展開せしめると同時に、人間（市民）生活の理念を表現し、更にその向上を実現せしめ得る条件のものでなければならぬ、という意味のことを提言した。

元来筆者によれば都市社会は同時に人間解放の場でもある。論者はしばしば古来の郷土性・愛郷心の美しさに嘆称の声を惜しまないが、そういう意味の郷土とは個性にめざめた人間にはまことに住みにくい地である。自他の区別がなく、一様に共存化し、全くの原始的共同制である。往年、離農棄村の傾向が漸くはげしくなった時、一つの社会問題としてこの傾向に多方面から原因の究明があった。道学者流は農村の青年男女が農業の労苦、生活の貧困を厭い都会の華やかな光に憧れて向都する事に道徳的非難を無遠慮に浴せた。経済論者は農村に余剰人口を養う経済力の無い事を分析してその止むを得ざるを説いた。与謝野晶子はひとり、農村生活の旧弊にして頑陋、没自我的なるは、到底個性に目覚めた子女のよく住み得る所でない旨を指摘した。土地に隷属し郷党に没個性的に同化した地方農村では人格の解放はなかった。これに反し都市はまさに市風自由の天地である。都市とは自由の淵源であるとは、都市論者のよく口にするきまり文句であるが、歴史的発展の過程に於ては、まさにその通りであったと認める事が出来る。農村に於ける村八分は、都会的には存在しない。しかし同じ都会といっても前近代的な都市、例えば明治の時代まで下町界隈では「町内にいたたまれなくなる」状態が決して珍しくなかった。現代大都市に於ては漸くそうした共同制裁は影を絶った。その最大原因には、居住移動の自由が完成していること、居住と職場との分離が有力に作用している。これにわが国でも職場移動の自由が完成すれば村八分にかわる職場八分すら消滅して個性解放は更に大成するであろう。

この種の解放は大都市民をして偏狭な土民性から国際性への人格を養成した。しばしば都市経営者は愛市心、郷土心に訴えたがるが、今日の大都市民は昔同様の郷土愛によってかたまるものではない。若し彼等の住む都市について愛好執着の精神が生れるとすれば、それは人間生活の尊重と福祉厚生の保証とを十分に提供する地域共同体への撰択的志向に外なるまい。これがアーバナイゼイションの課題でなかろうか。

（四）

人間解放、自由化の精神面に対して物的の面に於ても同様である。災害や不便、障害からの解放、窮乏、困厄、辛労からの解放等いずれもこの部類のものである。これに対して大きくはアジア的に小さくは日本的に、われわれは生活の快適を徹底追及するのに理念的に極めて弱力である。貧しさと労苦とを美徳化する傾向すらある。最近戯れに述べた事は、「日本人は泥路をみてすぐ長靴を考える。舗装化に思い到る事は程遠い。」寒ければ厚着、暑ければ、裸。即ち事態に処するに個人的であって、共同的施設的に処置しようという工夫と熱意に欠けている。まさに一人一人の「てんでんしのぎ」であると。

欧米人の場合に於てはこの生活感覚が全く異なっていると思わざるを得ない。それ故に前掲の著書が訓えた所は筆者にとって頗る大であった。たしかにアーバニズムとは人間尊貴と生活尊重をモットーにした主張に外ならない。

ここで前に一寸ふれた工業化との関連に移ってみたい。工業化・都市化なる言葉が平行語の如く流行的に使われるのはこの点に於て正当なる関連があるからである。筆者の属する前掲の委員会はその答申報告書に於て前述の如く生活環境施設の整備にあたって市民日常生活の尊重を説いた。従って昨今はやりの地域経済開発、（これ自体、経済企画庁の切言する如く所得並びに生活の地域的格差是正という点で、国土総合開発計画とならんで狙い方としては妥当そのものとして大いに賛意を表するのであるが）その開発方式が依然として工業第一主義で生産性上昇のみに力点がおかれ、生産性の上昇が基礎とする所の生活尊重がなおざりにされている点を痛烈に指摘し、更に市民日常生活環境の整備こそ焦眉の急務と結論した。事実、地方諸都市にも屎尿の終末処理施設の完備によって厚生行政の統計的実績は上昇したが、肝腎の住民各戸は依然たる汲取り処理にまかされているという実態はどう解釈するか。化学肥料の普及により農村が糞尿の始末に困却を感じはじめた事態にかくの如く対処する事由は十分あるが、それ故に各戸処理を従来のまま放置したのでは有終の美を為さぬ事になる。生活問題は前述の如く従来から共同化方式に進みにくい点もあったであろうが、同時にそれは大局的にも個人の各個対処の事項に属するものとして公共的に関心の払われる事が少なかった事情にも大きな原因がある。近代的都市生活がこの面に於て人間生活の尊重を強調する事は最も歓迎すべき事である。国民生活の動静がアンバランスである点は既に政府の生活白書の説く通りであるが、所謂レジュア消費に片より過ぎている大都市生活の華美な面は、道学者ならずとも確かに再考を要する点であろう。かくの如くにして欧米人は世界有数な大都会東京を目して偉大なる田舎と評価したのである。それは物的施設面についてであろうが、精神的心理的な面についても同断ではなかろうか。最近とみに強調されるにいたった「よごさない運動」なぞ、日本人の公徳心の欠如として指摘されているが共同化精神に十分徹しきれない、旧新ちぐはぐな事態の露呈である。

（五）

前段で地域経済開発の問題に言及したが、この点でも「現代大都市論」の立場から再考していい幾つかの課題がある。東京、大阪の過度集中に就いてそれは集中の持つ利点を既に逸脱して集中弊に及んでいると結論され、その過大化を抑制する大局的方策として、人口と富・資本とを地方に止め乃至は地方に配分する方式として地域経済開発の諸計画が策定された。新産業都市建設促進法の如きもその一助であるが、同法は実際的には工業開発を中心とするが如き所感を与え勝ちである。但し同条は冒頭に地方経済殊に工業振興にあたっては、都市の機能をその活動の中核をなすものと規定している。この点は正しく都市機能を認めたものとして大いに賛意を表したい所である。拙著に於て中心命題をなす、この都市的機能について、一応、それが正当に認められた事は、歓迎のいたりである。都市の中核的機能ということは、有力な工場が都市自体の内部に存在しなければならぬという事と同意語ではない。大都市附近の所謂大工業地帯は、今日それ自身所謂大都市の部類に入るかも知れないが、それ自体が十分なる中核体とはなっていない。むしろ地域的には工業生産の現場に過ぎないので、

かかる大工業地帯が成立し得る中核としては、東京・大阪・名古屋等の大都市が控えている。つまり地方経済の開発を工業化の方式で行うとしても、その成功の為めには都市化の実体のある有力都市を中核に持たねば不可能だという事由が明らかにされている。この意味で工業化と都市化とが平行的であるという事になる。

新産業都市建設促進方式はそれと前後して主張されたいくつかの開発方式を集成したものと考えていい。つまりそれぞれの関係当局から、地方中核都市論、百万人都市構想、或いは広域都市方式等、そのいずれについても都市の地域的生活共同体という点よりも、都市がその周辺に及ぼす影響、つまり勢力圏に対して持つ中枢的役割に着眼しての構想に外ならない。この事はわが国の都市研究が遂にこの位点まで前進したものとして都市研究陣の大いに自讃して可なる次第である。

（六）

いささか筆者みずからの自讃に堕した嫌いもあるが、二十年の所懐として思うことはなお二、三点ある。一つは都市科学の性格の問題である。研究陣の間には都市学（Urbanology という言葉を日本で造語しても差支えないではないかという篤学者の発言を十年程前に持った事をここに誌して敬意を表したいが）の成立は熱心に考慮された。筆者は今以てこの方針には極めて消極的である。第一、白状しておかねばならぬが、筆者の専攻分野である都市社会学（Urban Sociology）についての筆者の理解の浅薄さである。これは一九一〇年代からシカゴ大学社会学教室が主導した当時の新傾向であるが、その以前から興っていた農村社会学に対して対照的存在となった。筆者は単的に都市社会学そのものと受け取ったが、シカゴ大学教室の教授達が「シカゴそのものが社会学の大きなラボラトリー」と称した表現にもある様に、事実は都市社会学も社会学そのものの研究方法的又は研究対象的な一分野に過ぎなかったのであった。人間結合にあらわれる人間性の諸相の探究は、人間の環境的条件的変化に即して捉える場合、頗る有効である。二十世紀初葉に世界的現象として発生した大都市社会は、明らかに在来の集落条件からは全く異種的とも云って差支えない位の変革裡に人間結合及び人間性を置いた。この偉大な変革に於て人間及び人間社会はどの様に対応したか、ここに社会学者の注目する境地があった。それ故にこそ現代都市は社会学の偉大なるラボラトリーであるわけとなる。都市社会学そのものとして軽率に取り上げた筆者は、たとえそれが斬新な傾向であり、在来の都市研究に数段まさった研究効果が認められたにせよ、理解の浅さについては汗顔のいたりである。爾来、アメリカ大学の講義科目に於ても都市社会学という、そのままの名称は年を経るに従って減消しつつあった様に思う。都市学という方法論についてもまた頗る消極的であって、都市社会を学問的に研究する科学的方法という様な意味で極めてあいまいに都市科学というに過ぎない。この点、各方面からの教示を得たいところである。

第二は所謂、都市経済論である。「現代大都市論」に於てはその片鱗の如きものを示しているとも思われるが、これは遂に諸賢の期待に応える事なくして今日に及んでしまった。筆者の不学のいたす所ではあるが、同時にその頃、都市研究に対する経済学的アプローチが皆無であり、経済学者の関心もこの方面に必ずしも厚くなかった様である。学者としては前述の如く社会学的指向に汲々としていた為めとの弁解しかないが、依然として関心事ではあり、近来の傾向としては、例えば産業関連表の利用の如き、或いはその他の経済計算において既に何等かの業績が現われつつある様に思考している。

第三の点は都市科学的考慮にもかかわる点であるが、都市の総合性と総合的研究の体系という課題である。まさに都市現象は万華鏡的である。特に意識したわけではないが「現代大都市論」は何んでも論じてあるという批評を受けた様な始末である。一斑をみて全貌を知るという言葉が筆者の研究態度であった。筆者が都市研究の古典的文献として尊重するW・A・スモールの社会学研究入門の一章「都市成立史」は米大陸西部の大都市が人跡未踏の大草原の一角に若い開拓者夫婦がさまよい込んだ時の描写からはじまるのであるが、村落形成の以前まではこの開拓者夫婦、ならびに部落成立の過程を叙述的に記録している。まさに文学的手法である。しかし都市ならびに大都市時代の分析解明については、極度のゼネラリゼイショ

ンを行っている。この方法論的対照はスモールが意識して行っているところで、後段の段階では統計学的方法が正しく適用されるマス・ソサエティーとしての大都市となっている。筆者はこの場合でも大都市社会の成立・構造・性格、つまり全貌を弁えておれば、そのうちの一人格、つまり一斑をとらえて全貌を語る事が出来ると確信をしている。勿論、スモールがその著の前段で採用した様に文学的叙述に止まる恐れもあろうが。或いは又社会学の領域でしばしば採用されるパーソナル・ヒストリー、乃至はドキュメントとして可能であるかも知れない。この点でその出典は久しく忘却しているが面白い挿話がある。英国のものでコレクティビズム（前掲ウェッブについての所言に関連があるものだが）をめぐる論議であるが、「その市会議員がその日の市会で公営企業反対論を一席弁ずることになっていた。その日の朝、彼は自分の住いである公営住宅で目をさまし、公営電話で市役所に電話をかけ、今日の議事についてたしかめた。……外出の用意をととのえて、門を出たが、舗装された道路はすがすがしくきれいであった。市電に乗って先ず市の図書館へ赴く。そこで今日の反対論の材料を十分に整え、どこを急所として突くかなどと熟慮した……」というエピソードである。この市会議員の叙述にも一つの都市相は若干乍ら描き出されている。

兎に角、都市社会は極めて複雑多種多様であってそれらの事象を概括的に整理する事は極めて困難である。それ故に筆者の属している学会等が地方自治体から総合調査を依頼される度毎に、その総合性の方法論で筆者は極めて困却させられる。一応あらゆる角度、あらゆる分野を悉皆網羅してという事になるが、これは市政要覧方式に堕する事になって、決して真の意味での総合ではない。ここに総合方法論という難問が控えており、その解明について何回かの要請があったにも拘らず、遂に十分その責を果していない。若干の同攻者たちとの論議は行われたが、決定的段階に達しないまま、数年を経過している。「現代大都市論」にも引用してあるがアメリカの都市社会学に対して下したW・ゾムバルドの評言が痛く脳裡に残っている。都市研究の体系は、あれだこれだといろいろの分野をそれぞれに取上げ、そしてそれを集成してみても何にもならない。むしろ経済学的に都市を規定するという様に厳密な規定の方が正しいという意味の評言である。社会相や生活相はたしかに多元的で簡易な総合を許さないものがある。さりとて都市現象は決して経済的規定のみのものではない。先きに組織を論じた時に言及したが経済的決定に際しても、素材たる人間は百パーセントの経済人ではなく、実態はより多く、或いはより少く経済人的であるのが社会である。それ故に大綱的決定は経済的でもあろうが、大小強弱、素材の実態に応じての経済外的制約が存在している。それ故に総合とは、混沌雑然たる事相をそのまま受容する事ではなく、科学的な特定一系列に則して一応事象を整理し、しかる後、如何に多くの他系列の制約が如何に強く或いは弱く現実的規定に参加しているかを訊すべきではないかと思っている。例えば一都市の総合調査とは先ず経済的規定を中心に処理する。そのままで終れば、その都市の経済像は描き出されるかも知れぬが伝統とか信仰とか市民性とか、所謂経済外的制約によるゆがみを排除する事になってそれだけ現実像からは遠ざかる事になる。故に総合的手法としてはこの修正を行う必要が出て来る。

例えば某市に就いて隣接町村の合併問題が起った時、関係町村は必ずしも合併に同調では無かった。丁度町村合併促進法が実施され、五、六ヶ町村を一つにして所謂新市乃至は大きな町村を造ろうという時機でもあったが、ある村は、飛地的形式になっても中心市との合併を望んだ。その理由は合併しないと、合併促進法で他の町村に合体させられて了うが、それら他の町村とは昔流に云って国がちがうからそれとの合体には反対だというのが理由であった。明治の初期に定められた府県の行政区域が既に旧態化している今日、更に大昔の国名（即ち武蔵の国とか加賀の国というたぐいの国名）に対する執着がかくも大である現状に今更ながら驚かされる。この様な経済外的考慮も、実際には現実生活の厳しい規定の前には、さまで有力とは思えないが、経済的規定を主とした場合、一応外的制約として作用するという事実は残る。アメリカの地方小都市で、どうしても近代的な連鎖店が成功しないという事例があげられている。その理由は市民が購買に当って地元人の経営する店以外では絶対に買わぬという極端な排他性、つまり強靱な地元根性に基くものである。わが国に於ても地方都市に於て、他所

もの的業者はかなりうとんぜられるという事態があげられている。このように経済外的規定の作用が或いは強く或いは弱く働いている事を見逃すわけにいかない。同様に自然的条件その他の制約も、それらの都市の経済性の在り方に大小の影響を及ぼすであろうから、云う所の都市の総合的実態調査というものもしかく簡易なものではない。そして学問的に扱うとか各方面の科学陣を動員するからと云ってそれが単なる寄せ集めであってならぬ事は前述の通りであって、ここに総合の方法論が確立されねばならぬ緊要性がある。この点筆者が第三になお足らざるを思う点である。

（七）

第四点はむしろ行政的というか経営的というか、或いは計画性の問題とも云えようか。開発論議のさかんな事は既に指摘したが、その開発に当って前段で述べた総合性が考慮せられるにせよ、実際の施工に当っては必ずしも正しい手順（段取りと云った方が正しいが）で行われていないのが通例である。道路整備が出来ないのに建物が立つ。発展期の郊外に見る、個々の個人住宅なれば道路不備も新居住者の不便ぐらいで看過出来ようが、臨海工業地帯に数十万坪を擁する大工場が海面に向っての接岸施設は完備し乍ら、陸側内面の道路は旧来のままで狭隘をきわめ、更にその旧来のままの沿道住民に恐るべき迷惑をかけている。住宅団地は団地だけが立派で、その団地を結ぶ肝腎な交通網その他の整備については、事業外として放置されている。故に大小の都市を問わず一つの企画又は一ヶ所に新設される建設が全部或いはより広域に亘って持つ新しい関係についても十分な考慮を払うべきである。こうした総合的複合的な観点からは、従って事業遂行の上から当然、所謂戦略的考慮が要求されるが、この点に就いての研究に筆者自ら非常に不足を感じている。官庁都市、学園都市建設への要望は、漸く掛声だけでなく、その実現を見ようとする機運にあると見られるが、それだけに、こうした方法論的な面の遅れが気になる。

これら、いくつかの点は、今なお当該関係者が共に懐いている所感ではないかと思われる。われわれのあらゆる会合に於てそうした方面への不満や不平が必ずといってもいい位、きかれるが、ここにも一つの問題がある。最近ヴァノン教授が指摘した彼の言葉は正に頂門の一針ではなかろうか。それは、こうした都市改造なり新都市建設なりが、一般市民の側から強力な同調を得ていないという点で、一般市民は、けっこう、現状で満足している。そしてエリーテだけが甲論乙駁に興味を懐いているのに過ぎないのではないかと。これは確かに私達の反省しなければならぬ点で、その意味で企画庁内のさる委員会で生活環境整備の問題に関し、市民日常生活圏の整備に主眼が置かれるべき事を強調したのは至当な態度といえる。

大都市のみならず、全面的に激しい変革期にある今日、如何にこの変革に対処するかは皆に課せられた重大な課題である。問題はこの変革の性格なり方向なりを適正に把握することであって、各方面に切実な研究なり努力なりが払われている事は改めて説くまでもない。要はそれらが如何に無駄のない努力であり、如何に効果的に糾合されるかという点であろう。多年に亘る都市研究を振りかえって見ると、今日斯界の活動及びその発展の素晴しい事は確かに大きなよろこびである。それだけにまた、現代大都市問題を対象として、それらの成果をどう有効化するかという所に、もう一段の期待を寄せたい所以である。